

身重な身体でも手も足も凍る程の酷寒です、用を足し度くても釘を外すことも手が凍えて出来ないのです、走って帰って奥さんに外して貰って用を足しました。

街で立売りをしていると、満人の子供が「日本人の馬鹿野郎」と馬鹿にして屋根からだんどん物を投げるのです、悔しいけれど、負けたのだから仕方ないと思いました。

この様な惨めな思いをしながら、翌年の三月十二日無事に男の子を出産、乳呑児を抱えて佐世保に引揚げて来ました。

敗戦、苦難の日々

北海道 神田雅夫

昭和二十年八月九日ソ連軍は突然空爆して来た。

当時在満日本人男子は殆ど招集され、私もソ連の空襲の時は、奉天郊外の砂漠地帯で幕舎野営中であつた。

毎日の訓練は、急造爆雷を抱いて重戦車に飛び込む陸の特攻隊であつた。八月十四日午後非常呼集で、明十五日は重大放送がある謹んで聴けとの隊長の通達あり、いよ／＼決戦か、爆雷を抱いて散り果てるか、死の恐怖や、家族の安否や、生身の人間としての感情など一切考え及ぼす無我的心境とはこのことか。日本男子として国に報いる。只それのみであつた。

八月十五日未明非常呼集のラッパは鳴り渡つた。幕舎前の広場前に整列、出て来た隊長の足取りは、常の威風堂々たる英姿とは打って変つた、屠所に引かれる羊の風情である。

日本は敗戦した。只今終戦の詔勅があつた。居並ぶ兵も一斉に地に伏して号泣。

幕舎に帰り別命を待つ。お互いに見合す顔々々クシヤ／＼の顔、あれが日本男子の顔を流れる血涙か、武器弾薬、私物、食糧を残し外のもの一切焼却との命令、作業終了まで二日間を要した。

上部の命令も届かなくなつて、これからの行動は中隊単位となり、先づは奉天を指すことになつた。こ

年の八月は悔し雨とでもいうか毎日降り続いた。然も高温で行軍の苦勞は言語に絶するものである。

二昼夜歩いて辿り着いたところは遙か向うに満鉄の線路が見える丘、ここが何んところか見当もつかない。

この鐵路は満鉄が世界に誇る、特急アジアが轟音を発しながら驚進の雄姿を見ることができたが、今日は不定期に軍用列車がたまたま通るのみ、話し合いの末現地召集兵は解散個々に行動することに決まった。

新京召集者は十人、鐵道を利用するより方法がない。情報では鐵道もソ連に掌握されていて見つければ捕虜となる。又満人が暴民化して危険、爆雷を抱いて飛び込む決意をした当時は里心も、怨得も考える暇は無かったが、いよ／＼目的が帰宅と決まった今となれば、何が何でも、心は新京へと逸る。

丘の上から鐵道線路まで一晩がかりで暗闇を利用してやっと辿り着き、列車に飛び乗る機会を待つこと一昼夜、ついにその時が迫って来た。

天祐が薄暗くなりかけた頃貨物列車がソロ／＼とこ

の名も知れない駅に静かに止った。注意して見渡したがソ連兵の姿はない。

貨車の扉を押し開くなり脱兎の如く飛び乗り顔を見合せ、安堵の胸を撫でおろした。

さて奉天へ着いた時が心配になって来た。奉天は屈指の特殊駅でソ連の警戒も厳しいだろうし、運は天に任す覚悟をもつ外は無い。もうそろ／＼明け方ではなからうか、ソツと扉を少し開けると薄明りが入って来た。

この辺が奉天の近くの駅らしい。もし奉天で発見されたらと、思いは千々に飛び乱れるが考えているいとまはない。

列車は奉天駅に入って来た模様で、細目に開けた扉越しに目に入ったものは、枕木を山ほど積み重ね、まるで火祭りを思わせる炎が天を焦す有様、火影に写し出されたソ連兵の顔が赤鬼、青鬼に見える。

扉を閉めて固唾を呑んで息を潜め、早く発車を念ずるのみ、あ、天祐神の加護か列車が動き出した。虎口を脱して新京へと向う。

次の難関は新京駅の下車だが、新京駅まで行つては、張り廻らした網の中に入るようなもの、どこで飛び降りるかを相談した。

さすが新京在住者ばかりで地理に明るい。本駅の前に南新京駅がある。その間に急勾配の箇所がありスピードがダウンする、ここで飛び降りることに決し、そこ附近にさしか、つた時次々と飛び降り全員が成功した。

この土手を昇ると興安大路、児玉公園と続きお城の屋根風に造つてある関東軍司令部がある。公園の樹木の間を隠れながら、駅前通りに出た。満州が誇る新京の大同大街、幅員百メートルもあるうか、中央が電車道、その両側が並木道、それに並行して軽車道、その両側が人道、新京は曠野に自由に設計された都市であるからこの様な途方もない設計ができ上つたのである。

ここまで辿り着けばもう大丈夫、大成功であつた。皆で無事を祝い、再起を誓つて解散した。

私の家は近くの梅ヶ枝町である。家の前に立ち驚い

た「大韓民国居留民団保安隊司令部宿舍」の看板、私の血相は異状であつたかも知れない、殴り込みの心境であつた。

私は只今軍隊から帰還した、誰の許可を得て占據したのか。日本は敗戦したではないか敗けた者が何を言うか、朝鮮と戦争したのではない。等々のやり取りを奥の司令室の上役が聞いて出て来た。

私は家族を探して連れ帰る。直ちに空けて貰いたい。色々交渉の末二階を貸すこととなり一階を直ちに空けることで話が決着した。

私はハラワタが煮えかえるような思ひであつた。さて家族の行方である。各家は分厚い板を窓に打ち警戒をして知人宅など探しに廻つたが仲々開けてくれない。

誰ですか、神田です、声を聞いてやつと開けてくれる始末である。やつと岩本君の家に避難していることが判つた皆な無事で再会できて喜び合ったものである。

終戦の混乱、召集からの帰還、家の占據、家族の捜

索、引揚げるまでの約一年の労苦はこの位で終る。

夫は召集、子供二人は誘拐され

北海道 種 藤 はるの

昭和十三年満鉄大連埠頭に勤めていた叔父を頼って、主人種藤芳太郎と私は大連に移住し、満鉄に入社しました。

主人は叔父の力添えに感謝しておりましたが、その叔父が病気で大連病院に入院、主人が上司に看護を許され、懸命の看護の甲斐もなく帰らぬ人となってしまいました。

最後まで主人が看護ができたのがせめてもの心の償いと思います。

社宅を申し込んでありましたが入り当てがなく岡安宅に同居しお世話になっておりました。主人は夜間の語学校に通い十八年に中国語三級の検定試験に合格し職員に昇格し喜び合いました。

その頃満州でも空襲が激しくなり、町内では防空壕を掘り防火用水のバケツ訓練をモンベ姿で女も時々やりました。

夜は黒いカーテン、蛍光灯なんかなかった時代で電球に被いをし外に明りが洩れないようにしたり、ガラスには破損防止に紙をX型に貼ってB29の空襲に備え、綿を入れた防空頭巾を被り、非常食を入れたりリュックを背負って避難するのでした。この頃満鉄の社員にも召集令状が来て、残った家族同志社宅に集って共同で食事を作って生活する人もおりました。

食糧は配給、衣類は点数制となり、不自由な生活でした。主人は十九年三月十二日に極秘で入隊せよとの召集令状でした。

見送りもできず、家の前で静かに別れを惜しみました。やがて召集された主人から、牡丹江省綏芬河の部隊に入隊したとハガキが届き、二十年五月頃面会ができることを知り、綏芬河駅に良樹を背負い、澄子の手を引いて、もう一人の奥さんと一緒に部隊に行つて、面会を申し出ましたが許可にならず、旅館に三泊し、